

# 幼児の宗教教育

霜 田 静 志

四二

或るキリスト教主義の幼稚園に三年程勤めて居た保姆が、嘗て私に次のやうな二つの疑問を提出して來た事がある。

一、園児のKが肺炎で死んだ。その時他の園児の一人が斯う言つた。——先生はいつも御用の濟んだ人が、神様のお召で天國に行くのだと仰有つて居たけし、Kちゃんは未だ御用がすんで居やしない、まだこれから御用が一ぱいあると思ふに、さうして天國によべれたの？

——先生はいつも天國つて神様のお國だ、天國つてほんこにいゝ所だ、と仰有つて居るのに、Kちゃんが天國に行つたのがさうして悲しかつたの？さうしてKちゃんのお葬式の時あんなに泣いたの？

二、も一人の園児、その子は幼稚園を修了して、小學校に這入つたのであつたが、或る日保姆の所へ來て斯う言つた。

——先生はエス様が一番偉いんだつて仰有つたけし、學校の先生のお話だ、と違ふよ。學校の先生のお話では一番偉いのは天皇陛下だつて。それから家のお母さんに聞いて見たら、お母さんもさうだつて言つてたよ。エス様が一番偉いんだなんて、先生嘘を教へたね。

子供から投げかけられた此の二つの疑問に對して、保姆は答へる術を知らなかつた。保姆は自分達の不用意に行ひ來つた宗教教育の弱點を衝かれて、何とも答へる術を知らなかつた。子供の前だけはよい加減に言ひつくろつて、其の場だけ

さうにか濟ましたものゝさうにも濟まされぬ大きな疑問が後に残つた。これをさう考へたらよいかさいふのである。

## 二

此の間に答へる前に、私は、幼児のための宗教教育なるものを、もう一度本質的に考へ直して見たい。

宗教保育を主張する人には常に言つて居る。幼児の時期は、人間としての根底を基かれる。大事な時期である、此の時期に培はれたものは、其の人の一生を支配する大きな力となるものである、それ故に宗教教育は此の時期に於て、しつかりやつて置く必要がある——さ。

此の主張は、尤もなる主張ではあるが、更に遡つて、それなら何故に宗教教育を必要とするか、此の點について考へて見るに、それは結局人間として立派なものになるために、人間として良き生活に入るために、爲されるものであらう。

人間は誰しも幸福を希つて居る。而して良き生活、正しき生活によつてのみ、眞の幸福は獲得する事が出来る。それ以外の幸福は、幸福のやうに見えても、實は眞の幸福ではない。宗教を信する人々が、信仰生活こそ眞に幸福なる生活である事を信じて、これを子供の教育の上にも及ぼして行かうとするのは、まことに尤もな事であると言はなければならぬ。

しかし乍ら同じく宗教教育であつても、キリスト教の宗教教育もあれば佛教の宗教教育もある、日本古來のかんながら惟神の道による所の宗教教育もある、而してそれ等の中にも亦様々な宗派があつて、その宗派によつて色々な形態が生れて来る。

幼稚園に於ける宗教教育の如きは、左様な宗派の形態を濃厚に持つて來べきでない、さいふやうな事は屢々言はれるけれども、既に宗教である以上は、その依つて立つ宗派の信條に根底を置かなければならぬやうになるのは當然の話である。

子供から提出せられたさいふ、前記の二つの疑問の如きは、明かに宗派の信條による宗教保育の弱點を曝露せるものさ

言はなければならぬ。此の幼稚園はキリスト教の如何なる宗派による幼稚園であつたか聞き落したが、子供の疑問を通じて推察するに、兎も角、現世の思想よりも、來世の思想に重きを置く宗派に相違ない。さればこそ第一の疑問の如きも起つて來た譯で、來世こそ完全なる理想の世界であつて、現世はそれに行くための準備の世界であるに過ぎない事を強調せられた時、あのやうな疑問も起つて來るのである。

子供から發せられた第二の疑問は、キリスト教と日本の國體との矛盾を曝露せるものであつて、當然起るべき問題である。殊に今日の如く日本精神が強調せられ、國體明徴が問題になつて居る時に於て、此の點は相當考慮せらるべきである。いつだつたか新聞にも出て居た事であるが、聖公會の祈禱書の字句が問題にせられ、不敬に當る言つて、注意せられ、之を改訂せしめる事になつたさかいふ事であつた。其の問題の箇所さいふのはたしか、

「いさ高き天の父よ、恩恵めぐみをもつて我らの天皇を顧みたまへ」。

「願ねがはくは我が天皇に幸福さいはひを降し、眞まことに主を敬ひ、主の榮光を顯はさせ給はんことを」

なきの句であつたと思ふ。これは天地萬有を支配せらるゝ唯一神を崇めるキリスト教の立場からは當然の言葉であると思ふが、それが日本の國體の尊嚴を低觸する事になるさいふ、其處に考へなければならぬ大きな問題がある。

ニールは「問題の親」の中で、斯ういふ事を言つて居る。——歐洲大戰中、英國人は神は我等に味方し給ふと言つて祈つて居たし、獨逸人も同じやうに神は我等と共に在りて祈つて居た。神様はこれではぎつちに味方していか分らないではないか。人汝の右の頬を打たば左の頬をも向けよ、と言はれて居るが、敵の打つてかゝつて來るのに對して、從順に打たれて居る國がキリスト教國の何處にもないではないか。すぐにしつべい返しをして行くのが何處の國でも當り前である。而もそれをキリスト教徒が是認し、寧ろ獎勵して居る。キリスト教の眞精神が何處にありやと言ひたい。——さいふやう

な事を述べて居るが、國家主義キリスト教主義との矛盾は決して日本に於てのみでなく、歐洲に於ても起つて居る事を明確に物語つて居るものである。

### 三

斯う考へて來るに、教育に宗教を採り入れる事が必要だからと言つて、さういふ宗教をさういふ形に於て採り入れるかに就いては、餘程考へなければならぬ。而して日本の國體に合致すべき宗教は、日本古來の神道より外はない。然るに今日までこれが餘り研究せられて居ない。其處には日本の民族性に根ざした偉大なる思想が藏せられて居るのであるが、多くの人々は、これを宗教と解しようしない。それは宗教以外の祖先崇拜のやうなものだ位に思つて居る。近頃メーソン氏なぎのやうな外國人によつて研究せられ、今更乍ら其の偉大さを指摘せられて居る始末である。

大事な事は、日本國民のための宗教教育は飽くまで日本の民族性に立脚すべきものなる事である。佛教や基督教も、この日本の民族性と十分に融合した時、はじめて國民のための宗教教育として役立つのである。既に今日に於ては、それ等は十分に融合して居ると思ふのであるが、此の點に思慮を缺いた教師保母は、動もするに其の取扱ひを誤つてしまふ。

凡て宗教は超國家的、超現實的な所を持つて居る。其處が宗教の宗教たる所であり、宗教の偉大さも其處にあると思ふのであるが、されば言つて國家を離れた宗教、現實を離れた宗教は成り立たない。此處に微妙な關係がある。此の論の冒頭に提出した二つの疑問の如き、結局此の點についての取扱ひに失敗せるものであると言はなければならぬ。

そこで屢々言はれる如く、宗派の信條や宗派の形式を餘りに固執し過ぎるから、さうした弊も生ずるのだ、さういふ風にも考へられる。それ故に宗教教育は、殊に幼児保育に於けるそれは、既成の宗教を學ぶべきでなくて、寧ろさうした宗教

に向つて行くべき基礎となる宗教性——宗教的情操——を涵養するこそ大切である、と言ふ事に當然なつて来る。

勿論私は、既成の宗教による宗教保育を否定するものではない。たゞそれ等の宗教保育が、さうかするに日本民族さいふ固有な特性から離れる事を恐れるのである。それ故にどんな宗派の宗教保育でもよいから、それが眞に國民性に根ざした、現實の生活の上に立つものであればよいのである。

#### 四

子供は両親の影響によつて成育する。そして子供の宗教心も、子供の家庭生活、両親の生活の間から自然に生み出されて来て居るものである。たゞひ両親が我が子に對して意識的な宗教教育をせずとも、両親の生活そのものが無意識の間に子供に影響して居る。従つて両親が信仰の深い場合は、識らず知らずの間にそれが子供の上に及んで行くし、両親の神佛に對する態度が、自然のうちに子供に及んで行くものである。

そこで日本の現在のやうな、家庭によつて信仰が様々である場合には、子供は様々な影響を受けて来て居る。それ故に一定の宗派による宗教保育には餘程の困難がある。たゞへば此處にキリスト教保育の幼稚園があるとして、其處へ佛教の家庭や神道の家庭からの子供が来たさするに、其の子供は幼稚園と家庭と二つの信仰生活の板挟みになつて苦しまざるを得ない。前述の子供の疑問の第二に於ても、明かに幼稚園と家庭との信仰の不一致がある。若しも此の場合の母親がクリスチャンであつたなら、恐らくは別の答が出たであらうと思ふ。

其處で宗派によつて立つ幼稚園は、同じ宗派の者の子供だけを收容するのが最もよいのであつて、この點は幼稚園の當事者も、又其處に子供を托する親達も、十分に考へなければならぬ事である。

しかし乍ら、實際に於ては同信の者の子供だけを集めるまいふ事は困難な事であるから、勢いろくな家庭からの子供を收容しなければならぬ。さうなるま宗派の色彩の濃厚な宗教保育は避けなければならぬ。

そこで何によつて宗教保育は爲さるべきかが問題になつて来る。私の見るまところでは、日本の子供には、やはり日本民族としての共通な、無意識的信仰がある。其處には日本の傳統により、日本民族の生活の間に、自然に滲み込んで居る卑俗な信仰がある。鎮守のお祭、お盆や彼岸の行事、十五夜や七夕の行事、或は四辻に立つ馬頭観音、旗の澤山あがつて居る稻荷神社、初午の行事、七五三のお詣り、さういふやうな様々な生活の行事から、子供が無意識の間に受けて居る影響は存外大きい。これ等はそれ／＼宗教的な意義があつて始まつたものであつて、今日に於ては既に形式ばかりが残つて居るまはいふものゝ、其處にはやはり宗教的な匂が残つて居る。此の匂を嫌つて、斯ういふ生活行事の一切を迷信として斥け、家庭生活に入れない人もあるが——頑なクリスチャンなまによくさういふ人を見るが——それは決してよい事ではない。それは民族的生活の否定であるからである。

例へば、七五三のお祝ひで、七つ五つ三つに達した子供のある家では、皆晴着を着せて産土の神様にお詣りする。子供等は大喜びである。まところが或る家ではそれをしない。さういふ信念からか知らないが、それをしない。友達等は皆嬉しさに神詣りにつれて行つて貰ふのに、その子供だけはして貰へない。その子供は寂しい氣持で居るのである。斯ういふのは考へものだと思ふ。これ等の行事は、今ではもう民族的な生活形式になつて居る。これをしも斥けるまいふ事は、日本民族としての生活を斥ける事であつて、子供のために決してよい事であるま思はれない。

年中行事に現れた斯うした生活形式は、既に吾々の血となり肉になつて居るものであるから、而してこれは殆どすべての日本人に共通なものであるから、斯うした卑俗な信仰生活の様式の中から、我等の宗教保育は出發すべきであらう。此

の中から本當の信仰を育て、行つて、これを洗練し向上せしむること本當の宗教保育であると思ふ。

四八

## 五

結論として私は、日本國民のための宗教保育は日本國民としての民族性に立脚しなければならぬ事を主張する。而してこれが爲めには従來卑俗な形式と思はれて居た年中行事の如きものを生かして、其の上に眞の宗教保育が爲されて行くべきであると思ふ。

此の立場から子供の生活を中心にして、子供の宗教性を育て、行く保育こそ大切である。これが爲めには一宗一派に偏せざる生活保育こそ望ましいと思ふのであるが、一定の宗派に屬する幼稚園に於ても、此の精神の下に、民族性に立脚した生活指導を基礎として、其の上に宗教保育が爲されて行くべきであると思ふ。若しも斯うした子供の生活指導を忘れて、單に宗教的理想をのみ注入しようとするならば、其處に必ずや大きな破綻が起つて來るであらう。